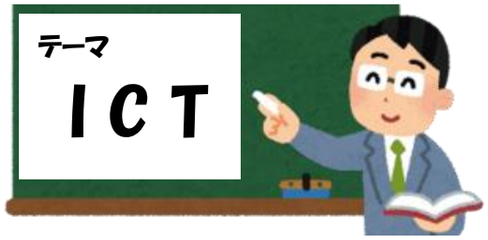
「学ばせ方改革通信　第3号」

令和４年３月２９日発行

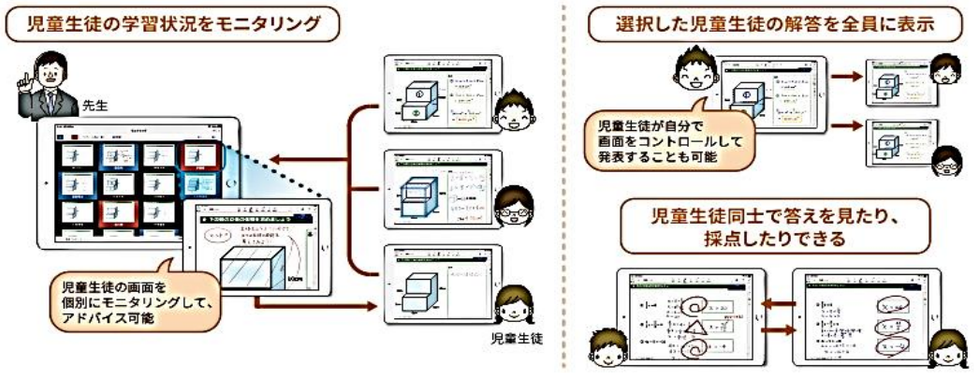
学ばせ方改革委員会



皆さん、こんにちは！早いもので令和３年度も終わりを迎えようとしています。今年度は新しい取組も多く、試行錯誤の日々でありました。次年度も新教育課程、観点別評価の本格実施と新しいことが盛りだくさんですが、お互い情報を共有し、知恵を出し合いながら乗り切っていきましょう！！

さて、最終号では ICT を特集します。令和４年３月 25 日（金）に実施されました「第７回校内職員研修」において、本委員会が MetaMoji の機能の一つである「モニタリング」を使った模擬授業を行いました。今回研修会の中に模擬授業を取り入れたのは、実際に活用する場面を見ることで、活用方法について、より具体的にイメージでき、メリット・デメリットも見えやすくなるのではと考えたからです。

「モニタリング」には、①生徒一人ひとりの学習状況を教員がリアルタイムに把握できる、②生徒が提出しなくても記述内容を把握できる、③モニタリング画面から、教員が個別にアドバイスを行うことができる、といった特徴があります。



この機能を利用して、今回は国語の授業を試みてみました。題材は萩原朔太郎の詩「天景」です。主たる発問を二つ用意し、生徒役の５人の先生方に答えていただきながら、その解答について全員で比較検討するような場面を設定しました。

天景　　萩原朔太郎

しづかにきしれ四輪馬車、
ほのかに海はあかるみて、
麦は遠きにながれたり、
しづかにきしれ四輪馬車。
光る魚鳥の天景を、
また窓青き建築を、
しづかにきしれ四輪馬車。

発問①「四輪馬車」はどう読むのか。またその根拠は？

発問②この詩に描かれている季節はいつか？またどの言葉からそれが読み取れるか。

以下は、授業を終えてみての気づきです。

① 教員が生徒の解答を一斉に見ることができるという点について

机間巡視をせずとも、生徒が言われた通りの作業を進めているかどうかの確認ができた。状況を見てヒントを出すべきかどうかの判断もできた。また、解答をざっと把握し、授業を展開させる上で、誰の解答と誰の解答を対立させ、討論させるかなどの指名の計画がスムーズにできると感じた。ただし、瞬時に把握したい場合は書かせる解答が短くないと難しい。細い線で解答が書かれていたため読みづらかった。

② 生徒の解答を共有するという点について

発表者の解答を皆で見ることはできる。しかしながら、①で述べたように教員が生徒の解答を一斉把握できても、生徒にはできないということがわかった。（模擬授業中は生徒も把握できていると勘違いしていました。）

③ 教材について

生徒がどこにどう書き込むかを想定しながら教材を作成したものの、書き込まれたものを見ると見栄えがよくなかった。画面上に収まるサイズを意識して、教材プリントを作成する必要がある。教員側としてはなるべく一枚に収めたくはなるものの、質問ごとにページを変更した方がよいかもしれない。（パワーポイントのスライドのイメージ）

④ 授業全体を通して

そもそもモニタリング機能を絶対に用いた方がよい場面とはどのような場面だろうか。今回は、国語の授業の中で、意図的に指名を行い、意見の比較や対立をもとに授業を進めていくような場面を設定してみたが、MetaMoji を使用しない普通の授業と比べた時に感じられる最大のメリットはやはり「生徒の理解度がわかる」ということだと思った。理解の状況がわかれば、教員側もそれに応じたヒントを出すことができる。

また、国語の場合、今回のような短い記述内容だけでなく、長い記述内容を発表させる時にも「発表者の声が小さく、教員が聞き取れない、書き取れない。」といったデメリットを解消することができると思われる。

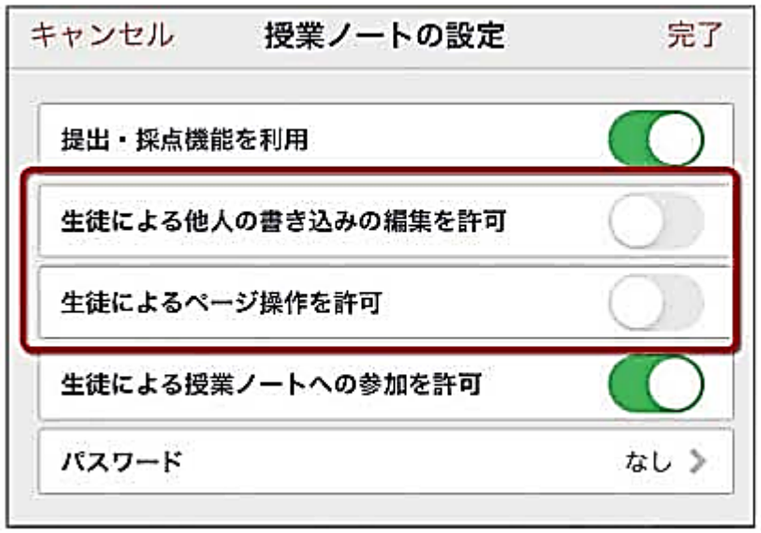
次に、参加された先生方との質疑応答の内容をご紹介します。

Q. 生徒が各自で書き込んだ内容を、他の生徒が添削することは可能ですか。

A. 個別学習における、生徒同士での添削はできないと思います。

Q. 教員が書いた内容を、生徒が消すことは可能ですか。

A. 共有レイヤーの編集を生徒に許可していれば消せます。



Q. オンラインで MetaMoji を使いたい場合にはどうなるのでしょうか。

A. リアルタイムに音声による指示を出したい、あるいは解説をしたいという場合、meet との併用でないと不可能です。MetaMoji だけでは、音声によるやり取りができません。筆談になってしまいます。

研修会を終えてみて、生徒の理解度を測りながら、双方向性を生む授業がデザインでき、確実に「思考力」と「表現力」を問う時間が増える、これが MetaMoji の利点だと感じました。もちろん、「問い」自体、生徒が考えたくなるようなものでなければなりません。そして、うまく活用していくためには、使用する目的を教科で、個人で考え、なぜそれを使うのかをことあるごとに捉え直すことが必要だと思いました。

ご参加いただいた先生方、どうもありがとうございました！

次年度も引き続き、先生方の授業実践を広く発信したいと考えております。次年度の授業改善テーマは「問い」「指導と評価の一体化」です。授業を工夫されている先生方のもとに委員が取材に参りますのでよろしくお願いいたします！